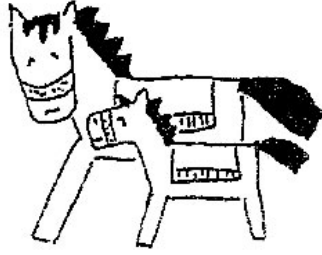


♪
お馬のかあさん
やさしいかあさん
子馬をみながら
ぽっくりぽっくり
あるく

おうまのおやこ

子育ても
あせらず待ちましょ
ポックリ、ポックリと



令和2年 4月 NO.305

〒 760-0044 香川県高松市御坊町2-2
高松第二保育園内地域子育て支援センター
TEL:087-821-9347 FAX:087-851-0857
<http://oumanooyako.sakura.ne.jp/>

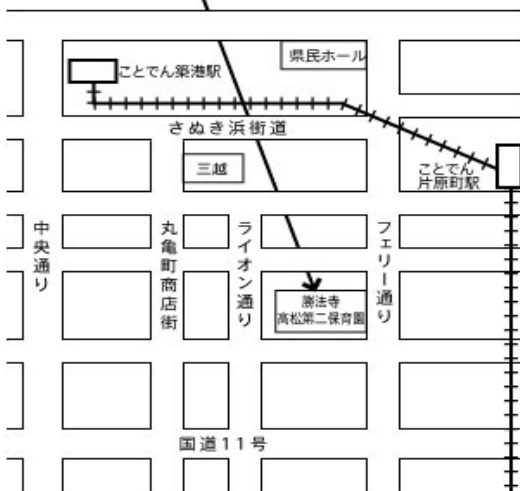
(厚生労働省・高松市委託事業)

～どなたでも～		4月の主な活動		～お気軽にどうぞ～
4月 10日	金	うたうたい「カラヴィンカ」	18:00～20:00	「花の街」「花」をうたっています。 春の到来にふさわしいうたです。
4月 18日	土	体験保育	10:00～12:00	お友だちと一緒にあそびましょう。
4月 15日	水	香川みすゞさんの会	11:00～13:00	春の玉藻公園で昼食をいただきながら、おしゃべりしましょう。 (弁当準備の為、4/10まで申込要)
4月 23日	木	こうさぎおはなし会	10:00～11:00	乳児さんから2歳までみんなで手あそびやおはなしを楽しみましょう。
4月 25日	土	おとなアート	14:00～16:00	粘土を使って玉ねぎの模様・色・手触りを感じながら自分だけの玉ねぎをつくりましょ。

・火～土の9:00～18:00までは、園内開放していますので、親子でご来園下さい。
(但し、月・日曜・祭日は休み)

育児相談 (月～土) 9:00～18:00
しつけや子育てについての悩み、保育園生活入園・見学についての相談もどうぞ。

香川県高松市御坊町2-2
地域子育て支援センター



金子みすゞ全集⑥
「さみしい王女・下」より

あけがたの花
お宮の太鼓は鳴ったけど、
花のおめめはまだ眠い。
しらしら明けの靄(もや)のなか、
とおくひびいて、近く来て、
だんだん消える轍(わだち)の音を、
花はうつつにきいている。
夢にまじって、その音は、
とおい、とおい、見知らぬ里へ、
花のこころをのせてゆく。
名なしの草の花たちは、
きのうの埃(ほこり)、今朝の露、
のせたまんまで、みちのはた、
うつらうつらと夢みてる。

ごあいさつ

社会福祉法人紹隆会

理事長 堀 侃子

ことしの春は校門や公園などどこを見ても桜が満開で春らんまんの雰囲気ですが、人々のくらしはコロナウイルスの拡大で、この先見とおしがつかない不安な毎日です。

当園も色々な方に助けていただきながら高松保育園から高松和貴こども園に移行し、林町で4月1日からスタートしました。4月4日(土)には入園式も無事に終わり、6日(月)からは園児の皆さまが登園をはじめました。

今まで高松保育園の地域子育て支援センターでしたが、令和2年4月からは高松第二保育園の地域子育て支援センター「こうまぐみ」としてスタートします。今まで通り御坊町の残っている園舎や穴吹ビルを使って活動を始めますので、是非ご参加ください。

「何のために働くのか」

今から24年前、春先に四国八十八箇所を巡りました。足裏にできた三十余りのマメ、寒風吹き荒れる雪中など厳しい状況に何度も遭遇しましたが、折々で出会う人に救われ、完遂しました。

中でも印象的だったのが、「お接待」文化です。町の人はお遍路さんに宿や食事を提供したり、励ましの言葉をかけてくれます。根幹には信仰心がありますが、行為そのものは奉仕精神に他なりません。

この損得抜きで相手に寄り添い、人のために働くという精神は、現代にも継承され、被災者への支援や地域の清掃活動、献血など様々な場で見ることがで

きます。その中に皇居と赤坂御用地で清掃活動を行なう皇居勤労奉仕があります。

この皇居の清掃活動は、全国より 15 歳から 75 歳までの老若男女を対象に戦後 74 年間継続しています。この活動は、宮城県栗原郡の青年団員の純粋な日本を愛する心から始まりました。

国会議員の秘書官をしていた長谷川峻氏は、終戦直後、郷里の栗原に帰った際、日本の現状と共に戦後の混乱により皇居周辺が荒れ果てていることを地元の青年たちに伝えました。それを聞いた青年たちは、戦火で荒れた外苑の草むしりなどの清掃活動をしようと決意します。

長谷川氏と青年団の代表が昭和 20 年 11 月に皇居坂下門を訪れ、宮内庁職員に栗原の青年たちの思いを伝えたところ、職員は 2 人の申し出を快諾しました。

12 月 8 日から 11 日にかけて、第一陣の約 60 名が皇居を訪れました。滞在中の 4 日間、20 キロ近く離れた寄宿舍から通い、瓦礫^{がれき}の撤去作業などを行ったそうです。この奉仕活動は日本を占領統治していた GHQ から逮捕される可能性もありました。中にはそれを覚悟し、地元を離れる際に親と水^{みず}杯^{さかずき}を交わした団員もいたといいます。それほど〈皇居を片付けないと日本が立ち上がれない〉との思いが奉仕活動の背景にあったのです。

宮内庁職員から経緯をお聴きになった昭和天皇は、団員のもとを訪れ、30 分ほど郷里や道中のことを質問されました。挨拶が終わり、お帰りになる陛下の後姿に向かって、誰ともなく団員たちが「君が代」を歌い始めました。すると陛下は足を止め、お聴きになりました。その後、全国にこの話が伝わり、現在のような皇居勤労奉仕へと繋がっていったのです。

奉仕とは、神仏や人に謹んで仕えること、利害を離れて国家や社会に尽くすという尊い働きです。

奉仕というとは日常生活や仕事とかけ離れたものと思われがちですが、様々な業種でみられるホスピタリティーや東京オリンピック誘致でも脚光を浴びた「おもてなし」の精神にも通じます。

とある旅館では、おもてなしの定義を「宿泊客が求めていることを、求められる前に提供すること」とし、マニュアルや心得を超えたサービスを提供するべく最前線に立つ客室担当をサポートする体制を整えています。そのため、客室担当は集中して宿泊客と向き合い、相手が求めていることを理解できるのです。

このような働きは、損得や好き嫌いなどの判断基準を超えた所に存在しています。自分の立場と役割を理解し、人に喜んでもらいたいとの思いが鍵となります。そこで重要なことは「何のために働いているか」、つまり働く目的です。

働くことは収入を得るだけでなく、働き方次第で他者を救い、喜ばせ、時には勇気づけ、感動を与える力があるのです。

人生の3分の1は仕事に費やしている私たち。この時間が豊かに過ごせれば、さらに生活は充実するでしょう。

今の働きをレベルアップするポイントは、「喜んで」「進んで」「人のために」仕事を従事することにあります。はじめの「喜んで」は仕事の意義を知ることによって深まり、「進んで」は目的と手段を念頭に自分の立場と役割を知り、積極的に自分から働きかけることで高まり、「人のために」は人に認めてもらいたいという欲望をコントロールしつつ、相手に寄り添うなどの思いやりの心をもって人の喜びのために尽くすことで養われます。

人に与えた喜びは巡り巡って自分に必ず返ってくるものです。働きをワンランクアップし、人に喜ばれる人生を創造していきたいものです。